

## 「SAIJO 数理・データサイエンス・AI リテラシーレベル教育プログラム」 自己点検・評価報告書

令和 5 (2023) 年度 4 月より、本学では「SAIJO 数理・データサイエンス・AI リテラシーレベル教育プログラム」をスタートした。自己点検・評価委員会では、プログラム責任者および教学マネジメント委員会からの報告、種々のデータにより点検し、当該プログラムが目指すところに照らし、適切に機能していると評価したことをここに報告する。

令和 5 (2023) 年度のプログラム概要、履修・修了状況、および点検・評価の詳細は次の通りである。

### ◆令和 5(2023)年度プログラム概要

#### ・プログラムの目的：

社会における数理・データサイエンス・AI の重要性と活用事例を理解し、データの特徴、事象の背景や意味を理解する力、および情報化社会における情報倫理に関する知識を身につけた次世代を担う人財を育成すること。

#### ・プログラム構成科目（必修 3 科目 5 単位／選択 1 科目 2 単位）：

必修①「コンピュートリテラシーB」（キャリア基礎科目 1 年次秋学期配当 1 単位）

必修②「AI と社会」（デジタル社会基礎科目 1・2 年次秋学期配当 2 単位）

必修③「コンピュータ基礎知識」（商学科専門科目 1 年次春学期配当 2 単位）

選択①「データサイエンス」（デジタル社会基礎科目 1・2 年次春秋学期配当 2 単位）

#### ・修了要件（全学科共通）：

プログラムを構成する 3 つの必修科目「コンピュートリテラシーB」（1 年次秋学期配当、1 単位）、「AI と社会」（1・2 年次秋学期配当、2 単位）、「コンピュータ基礎知識」（1 年次春学期配当、2 単位）の計 5 単位を修得することが修了要件である。関連する「データサイエンス」（1・2 年次、2 単位）は推奨科目（任意選択）とする。

#### ・プログラム責任者：

三好善彦（商学科長／プログラム構成科目担当者）

#### ・プログラム管理および進化に係る組織：

教学マネジメント委員会（委員長 山田雅子）

#### ・プログラム点検および評価に係る組織：

自己点検・評価委員会（委員長 三ツ木丈浩）

## ◆令和 5(2023)年度プログラム履修・修了状況

Table 1-1 令和 5 (2023) 年度プログラム履修者数および履修率

	1 年生	2 年生	合 計	履修率
商学科	129		129	43.0%
国際コミュニケーション学科	82		82	27.3%
合計	211		211	35.2%

※令和 5 (2023) 年度開設のプログラムであるため、2 年生 (2022 年度入学生) は対象外。

※履修率は、収容定員 (各学科 2 学年 300 名/両学科合計 600 名) により履修者を除算して算出。

Table 1-2 令和 5 (2023) 年度プログラム修了率

	1 年生	2 年生	合 計	修了率
商学科	32		32	10.7%
国際コミュニケーション学科	0		0	0.0%
合計	32		32	5.3%

※令和 5 (2023) 年度開設のプログラムであるため、2 年生 (2022 年度入学生) は対象外。

※履修率は、収容定員 (各学科 2 学年 300 名/両学科合計 600 名) により履修者を除算して算出。

## ◆令和 5(2023)年度プログラム自己点検・評価概要

### ・プログラム履修・修得状況：

令和 5 (2023) 年度のプログラム履修状況 (プログラム構成科目を 1 科目以上履修) は 211 名であるが、修了条件を満たした学生 (必修 3 科目を修得) は 32 名となっている。収容定員に対する履修率は 35.2%、修了率は 5.3%であるが、令和 5 (2023) 年度からスタートしたプログラムであるため、実質的には 1 学年のみが対象であり、プログラム初年度としては良好な履修・修得率であったと評価する。プログラム開設 2 年目となる令和 6 (2024) 年度には、所定の 3 科目全ての修得を完了する学生が増え、履修者数が修了者数に近づくことが期待される。

### ・学修成果：

指定の各科目が担う学修成果は、プログラムの趣旨に沿って適切に設定されていると判断される (Web シラバス参照)。また、最終的な単位修得状況や授業開始時と終了時を比較した「授業アセスメント」の報告からは、実際にも各種知識の幅が拡大し、能力の伸長があったことが確認された。

学修成果獲得の一層の拡大に向け、対象科目間の連携強化、教授法の工夫、LMS (WebClass) の活用などを通じた、さらなる授業改善が望まれる。

### ・学生の内容理解度：

教務委員会による「学生の声」アンケートの結果では、学生の理解度や内容の分かりやすさの項目の平均値として 4.04 ポイント (満点 5 ポイント) が示され、一定の理解度の上で授業が進行されていたことが確認された。設定した学修成果だけが独り歩きすることなく、適切に授業が運営されていたものと判断する。

・全学的な履修者数・履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況：

令和 5（2023）年度のプログラム必修科目履修者数は、「コンピュータリテラシーB」が 211 名、「AI と社会」が 67 名、「コンピュータ基礎知識」が 82 名であった。

「コンピュータリテラシーB」、「AI と社会」の 2 科目は、それぞれ、キャリア基礎科目、デジタル社会基礎科目として選択必修の指定がなされ、教員からの指導によっても履修促進がなされていると捉えられる。一方、「コンピュータ基礎知識」は商学科の選択科目であるため、国際コミュニケーション学科生は他学科科目として履修することになるが、2 単位以上が必修である上、14 単位までは卒業単位として認められる制度があり、当該学科生が不利な状況にあるとは判断されない。

ただ、プログラム修得者率に明らかなように、令和 5（2023）年度の段階では、国際コミュニケーション学科の方が本プログラムに対してやや消極的な状況にあると捉えざるを得ない。学科が掲げる教育目的の性質上、商学科の方がよりプログラムとの親和性が高いと捉えられるが、国際コミュニケーション学科においても履修促進を図り、全学的な取り組みへと発展させていくことが望まれる。

・プログラム修了者の進路：

本プログラム修了者の卒業は、令和 7（2025）年を待つことになる。社会が求める人材育成となっているか、自己点検・評価委員会としても注視していく。

・教育プログラム内容・手法等への産業界からの意見：

本学では、毎年度行う「外部評価ヒアリング」「企業アンケート」「企業ヒアリング」等を通じ、産業界からの声を収集している。本プログラムだけをテーマとせずに意見を収集した中では、数理、データサイエンス、AI に関する教育の強化を求める声が特に強く寄せられたという事実はないが、生成 AI が日常的に使用されるようになった現状では産業界からの要請が大きく変化する可能性もある。

令和 6（2024）年度以降の種々の調査では、本プログラムに関する直接的な意見収集にも取り組み、プログラム内容や教育手法を一層洗練させていくことが期待される。

・教育の質向上に向けた取り組み（理解度向上・学ぶ楽しさの伝達等）：

学期末の定期試験以前にも、授業中盤に行われる「学生の声」アンケートや提出課題の状況、毎回の授業で行われる振り返りテストなどによって履修者の理解度が測られ、状況に合わせた授業進度の調節や補足などが丁寧になされていたと評価できる。また、新聞記事を取り上げたり、データ・AI の利活用を積極的に取り上げたりするなど、社会生活における学修内容の活用が具体的にイメージできる展開ともなっており、分かりやすく、目標分野の学びの楽しさや意義を伝える工夫もなされていたと言える。

授業の相互見学による教授法の学び合いや、3 科目全体としての内容整理・更新により、プログラム全体としてのさらなる質向上も今後実現できると考えられる。

以上